

マタイによる福音書 17:22-27

おはようございます。今日も一緒に御言葉に聞いて参りたいと思いますが、ところで、どうして私たちは一緒に御言葉に聞こうとしているのでしょうか。それは、御言葉によって自分に収まりをつけるためでもあります。それが許されるのは、御言葉を通し、神様の愛の中にある自分自身を発見するからです。そして、そのために私たちに与えられたものがイエス様の十字架と復活の出来事でありました。今日はそのことがイエス様の口を通して先ず語られています。その次に語られていることは神様の愛の中にある私たちのその姿です。それゆえ、私たちは、「私は私である」ということを知らされるのですが、ただ、この「私」というものは様々な姿をもっています。そのため、御言葉を通して、私たちは様々な思い巡すことにもなるのですが、そこで考えたいことは、この日の御言葉がその私たちに何を伝えようとしているのか、ということです。

イエス様に限らず、人の発する言葉には、その語る表情、言葉遣い、その人柄など、語られた言葉以上のものがそこに現されるものです。ですから、言葉が人の心を打つのは、その人の人柄が言葉としてストレートに伝わった時でもあります。それは、御言葉においてもそうです。この日の御言葉の中に、「汝想い煩ろうことなかれ」と仰ったイエス様の言葉通りの姿を見ることができるのはそのゆえのことでもあります。つまりは、それがイエス様のお人柄であるということです。私がイエス様の笑い声が聞こえたように思ったのはそれゆえのことでもあります。それゆえにまた、その笑い声は私を愉快にさせ、また、ホッとさせましたのです。それは、直前に記されていることが心の中で大きな位置を占め、神様に愛されている自分自身の姿を見失いかけていたからです。それがイエス様の十字架と復活の出来事ではありますが、ですから、御言葉が「弟子たちは非常に悲しんだ」と記すこの弟子たちの気持ちは私にもよく分る気がします。しかし、ペトロに向かって、イエス様がここで様々な仰っているのは、悲しむ弟子たちの気持ちを慰め、鎮めようとしてのことではありません。

神様の祝福を受け、この礼拝堂よりこの

世に送り出される私たちの身の上には、その日々の生活において実にいろいろなことが起こるものです。まただから、その中で、私たちは現実に流されず、また、自らの考えや思いに溺れず、信仰者としてしっかりと立とうとするのですが、その私たちに与えられている役割が先週皆さんにお伝えしたことでありました。それは、世に希望を伝えるという役割です。そして、それが私たちに許されているのは、私たちが信仰によって、地にしっかりと足を付け、生きているからです。ですから、私たちにこうして与えられている信仰とは、ふわふわした、捉えどころのないものではありません。世に希望を伝えるということが、地を耕し、種を蒔き、畑と作物の手入れをし、そして、神様に感謝しつつ、隣人たちと収穫を共に分かち合うものであるように、私たちがこの役割を喜んで担うことができるのは、その心に神様が造られたこの世界に生かされていることへの喜びと感謝があるからです。そして、それが私たちに許されているのは、自分が何者であるかがはっきり分かっているからです。そして、それが、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして神様を愛し、また同じように、隣人を自分のように愛するということでもあるのですが、それが私たちに分かるのは、分かる分からない以前に、神様の恵みに満ちあふれた場にこうして生かされているからです。ですから、イエス様がそんな私たちのことを「地の塩、世の光」と呼んでいるのはそれゆえのことでもあります。ただし、この恵みに満ちあふれた場所は、あっちからもこっちからも、イエス様の言葉、声だけが一方的に聞こえてくるような、そんな騒々しい場所ではありません。言葉だけがわーわーまくし立てられるような場所ではなく、そこはイエス様と触れ合うことが許されている場所であり、そのお人柄を深く知らされる場所でもあるのです。そして、この恵みの満ちあふれた場所に置かれているのが私たちとイエス様との普段の暮らしでもあります。ですから、私たちが世に希望をもたらすことができるのは、そこに私たちが生きて、このイエス様と触れ合っているからです。

この日の御言葉は、そんな私たちの生活の一端を伝えてくれているものでもあります。

すが、ですから、この日の御言葉に聞いていくうちに緊張が解け、知らず知らずのうちにホッとさせられるのは、私たちがそのような恵み深い、イエス様との豊かな交わりに置かれているからです。私にイエス様の笑い声が聞こえてきたのはそれゆえのことでもあります。それはまさにイエス様が「疲れた者、重荷を負う者は、誰でも私の元に来なさい。休ませてあげよう。私は柔和で謙遜な者だから、私の軛を負い、私に学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。私の軛は負いやすく、私の荷は軽いからである」とこう仰っている通りのことが起こっているからです。ただし、ここでのペトロがそうであるように、このイエス様との暮らしは、イエス様が共にいるからこそその煩わしさもあるのです。徴税人がわざわざペトロのところにやって来て、「あなたたちの先生は神殿税を納めないのか」と尋ねているのは、イエス様と共にいるがゆえのことだからです。

では、この徴税人の目的は何だったのでしょうか。ペトロが向きになって「納めます」と言い返し、また、イエス様には直接何も言っていないことから、恐らくは、からかい半分にこんなことを言っているのでしょうか。つまり、「奴らがやって来たから、一つ、その弟子たちをからかってやれ」と、実際に徴税人がそう思ったかどうかは分かりませんが、けれども、そういう人々の好奇な目、時に、悪意のようなものに取り囲まれているのが恩恵の場に生きる弟子たち、私たちでもあるのです。そして、そのイエス様が私たちとこうして共にいてくださっているわけですから、現代を生きる私たちもそれについては同じです。最近ではあまり聞かれなくなりましたが、かつては「アーメン、そーめん、冷やそーめん」と、クリスチャンをはやし立てる言葉が日本中あちらこちらで聞かれたものです。特に、子どもたちの中で、盛んに言われていたように思いますが、ですから、ここでの徴税人の姿を見ていると、かつての自分の姿を思い出し、それだけにまた、向きになって「納めます」とこう言い切るペトロのその気持ちが想像されて仕方ないのです。それは、子ども時代のことを思い起こして、悪いことをしたなあ、と思うからです。そして、私をしてそう思わせるのは、ペトロのイエス様への強い思いを感じるからです。

人が向きになるのは、その人に熱い気持ちがあるからです。ペトロもそんな一人で

ありました。ところで、こういう人が向きになるところを皆さんはどう思われるのでしょうか。人間的でとてもいいと思うのか、それとも、我慢が足りないと思うのか、その見方は人それぞれであるように思うのですが、ただ、私が気になったのは、ペトロが向きになったその理由です。それは、「納めます」とこう言い切っているところに現されているものが、ペトロの世間に対するものの見方、関わり方であり、つまりは、ペトロの人間性そのものが現されていると思ったからです。ですから、ペトロが「納めます」と言っている理由は世間体を気にしてのことだとも考えられますが、ただ、ペトロをしてこう言わしめているのはそれだけなのでしょうか。神殿税というものは、ユダヤ教の宗教コミュニティの中にあっては、そのメンバーだけに課せられた義務でもありました。ですから、それは、神社が、その人が信じる信じないにかかわらず、その土地に住むすべての人々を氏子として扱うのと同じです。コミュニティに生きる以上、必ず支払わなければならないものだからです。ですから、ペトロが「納めます」と向きなこう答えているのは、イエス様も自分もユダヤ教の一員であるとの強い自覚があったからです。しかし、それが1番の理由なのでしょうか。私がここで語られていることに興味を抱くのはこの点です。

ペトロのイエス様に向けられたその強い思いとは、ペトロとイエス様との一体感がそう言わしめたのであり、つまりは、ペトロの身贔屓がこう言い切らせたということです。ですから、人としての素朴な感情が自然と現されているところに、どこかホッとさせられもしますし、何よりもそういうペトロのことをイエス様が穏やかに受け入れているところに、私たちは安心させられもするのです。それは、これもありなんだと、そう思われるからです。そして、それはまた、イエス様がペトロと自分の二人分の神殿税を支払ったように、人としての自然な心の動きを大切にされるのがイエス様というお方でもあるからです。ですから、ここで語られていることは、イエス様の語った、その文字通りの言葉だけに意味が置かれているわけではありません。言葉を通しそこに現されているもの、それはイエス様のお人柄であり、イエス様の物事の見方であり、人との接し方、関わり方ありますが、つまり、御言葉が私たちに伝えようとしているのは、文字通りの言葉その

ものではなく、イエス様の人格そのものについてであるのです。

そして、イエス様の人格、お人柄に触れ合っているのはペトロだけではありません。そこでどうしても気になってしまうのが他の11人のことでもあります。その点について少し触れますと、神殿税が義務である以上他の者も勘弁してもらったわけではありません。他の11人にもここで起こったことと同じことが起こっているのです。それは、神様とイエス様がそれだけ気前のいい方でもあるからです。そして、この気前の良さであります。その最も大きなことが十字架と復活の出来事でありました。ご自分の独り子の命を、そして、その自らの命を、私たち人間の罪を贖うために差し出されたのが神様とイエス様であるからです。そして、このことはまた、信仰が時に損得で捉えられることがあるように、私たちが世に希望を運ぶ上で、この神様とイエス様の気前の良さを知っておくことは大切なことなのです。なぜなら、私たちが希望を世に伝えることができるのは、この豊かさにあずかってこそそのものでもあるからです。

しかし、信仰は私たち人間の価値観に従うだけなら、明らかに損なことだとも言えるのでしょう。なぜなら、その証拠に、昨今では、世の多くの人々が信仰を持つと言うことについてはネガティブな評価を下すことから分かります。ところが、私たち人間が考えるような損得ではなく、それとは反対のことを考え、行動したのがイエス様でありました。それは、イエス様がやせ我慢をしているからではありません。イエス様がそうしているのは罪なき神の子であるからです。つまり、神様の喜びがイエス様ご自身の喜びであるから、イエス様が損を得と考えるのはそのためです。そして、このことをペトロに教えるために、イエス様は自ら進んで話しかけるのですが、その姿はとても自然なもののように思うのです。ただ、そこで先ず語ったことは、この世の原則、ものの考え方を確認することでもありました。そして、イエス様はその上でペトロに向かってこう仰るのです。「では、子どもたちは納めなくても良いわけだ。しかし、彼らを躓かせないようにしよう」と。

イエス様の気前の良さは思いつきのようないやな軽いものではありません。よくよく考え抜かれたものであり、それゆえ、このイエス様の判断は、イエス様に倣う私たちの、

この世に立つ上での基本的な考え方になるのです。なぜなら、ここに立つことが神様とイエス様に喜ばれることであり、そして、そこに現されるものが十字架と復活の出来事を信じる、私たちの信仰でもあるからです。そのことをペトロは、イエス様のお人柄に触れ学ぶことになったのですが、イエス様がそれをこのような形でペトロに伝えようと思ったのは、ご自分に向けられたペトロの思いの深さを危ぶまれたからでもありました。ただ、この思いの深さは、無碍に退けられるべきものではありません。けれども、思いの深さは人間を思考停止の状況に陥らせ、結果、感情を暴走させる危険性もあるのです。しかし、だから、情緒を排すればいいということではありません。信仰において気持ちの問題は理屈よりも優先させるべきことだからです。なぜなら、好きという気持ちが理屈で割り切ることが出来ないように、人間の行動を最終的に左右するのは感情であって理屈ではないからです。ただ、感情に流され、溺れることはさらに危険なことです。自分が何者であるかを見失わせるだけでなく、感情が暴走するとき、私たちは人間とは思えない、別の何かに変わってしまう可能性を秘めているからです。ですから、原則、建前というものは、そういう私たち人間の失敗から築き上げられたものでもあります。それが私たちの信仰における十字架と復活の出来事でもありました。

ですから、イエス様が示された原則は人の理屈で整理できることではありません。イエス様のお人柄を通し、私たちの依って立つところがどこなのか、ここでのことは、それが神様の愛の中に在ることをイエス様ご自身が教えてくださっているのです。そして、魚の腹の中から銀貨一枚が見つかったことがまさにそのことを私たちに教えてくれているわけですが、私たちにそれが示されたのは、イエス様が私たちから片時も目を離すお方ではないからです。ペトロという形式的な呼びかけではなく、「シモン」と親しみを込めた呼びかけがそのことを明らかにしてくれているように思います。それは、私たちの命、人生の置かれている場所が、人の損得勘定だけがまかり通る場所ではないからです。何をしても良かったから、何をしたかによって左右されるものではなく、神様とイエス様の恵みに満たされた場所、それが私たちが今こうして生きる場所だからです。ですから、ここに立つとき、私たちはイエス様のように柔

軟に、そして、大らかにこの世の物事を見つめることができます。イエス様が「彼らを躓かせてはならない」と仰るように、イエス様のお人柄に触れ、イエス様のなさること、語られることを私たちが原則、つまり、ここが私たちのよって立つところであると理解するとき、私たちは、私が私であることを理解し、自分自身に収まりを付け、私たちは人と交わり、関わり、分かり合うことが出来るのです。そこで最後に皆さんに一つお尋ねしたいのですが、それは、幼稚園のある子どもが言ったある一言についてです。

その子は、「僕は神様は男でも女でもないと思うんだ」と言ったのですが、それについて、皆さんはどのように答えられるのでしょうか。正解は、神様が父なる神様である以上、神様は絶対に男だと言うことだと思ふのですが、ただ、そこで、皆さんにお考えいただきたいのは、神様とイエス様がその答えを本当に望んでおられるのかということです。神様が父である以上、男性であるのは間違いありません。しかし、そう私たちに尋ねるその相手は子どもです。そう言い切ることは見も蓋もない話であり、かといって、事実をねじ曲げるわけにも参りません。じゃあ、どうすればいいのか、イエス様の笑い声が聞こえてきたのは、まさにその時でありました。

その子が男でもなく、女でもないといっているのは、男か女かということを決めることに躊躇いを覚えたからです。そして、それは、父なる神様を、遠藤周作が母なる神と言っていることと同じことが言えると思います。つまり、教義的に神が男か女かということその子は言いたいわけではなく、神様について感じたままを言葉にただけだということです。そして、その子どもに決まらなかったのは、その子にとって最も身近な存在である男と女がその子の両親であったからです。つまり、その両親から生まれたのがその子であり、その両親に深く愛され、日々、喜びをもって過ごしているのがその子であったということです。ですから、その子にとっては、神様は男か、女かに決められることではありません。でも、だから、どちらでもいいということでもありません。男でもなく、女でもないと言ったのはそれゆえのことでもあります。では、その言葉を私たちはどのように受け止めればいいのか。感情に流され、また知っている知識に寄りかかるだけで、その子、その親子と分かり合

うことができるのでしょうか。

ここで御言葉がイエス様のその姿を通して私たちに伝えようとしていることは、イエス様を信じ、信頼すると言うことが人の善意におもねることでもなく、また、空気を読むことでもないということです。私たちが原則を持ち、その原点に立つと言うことは、私が私であることを見失わないことであり、つまりは、神様の愛の中に置かれた自分自身をどんな時にも見失わないと言うことなのです。そして、そのために必要な事は人と繋がっていようとする気持ちと大らかな気持ちを持つことです。ただ、それが難しいのは私たちも知っています。神様に喜ばれることではなく、自分自身を喜ばせることに執着し、罪ある状態にどこまでも留まり続けるのは、この原点、原則を見失っているからです。だから、私たちはそれを誤魔化すことの出来る理屈を求めてしまう。しかし、私たちがこのことに気づくために、紙の上に書かれた言葉ほど無意味なものはありません。イエス様が説得を試みていないのはそのため、そうであるからこそまた、私たちは人として歩む神の子であるイエス様のお人柄に触れ、イエス様がこうだったからこうしようと、そう思い、同じように振る舞う必要があるのです。

では、私たちがここに立つとき、先ほどの男の子に私たちは何と語ることになるのでしょうか。世に希望を運ぶ役割を私たちが担うということはそういうことであり、それが私たちに許されるのは、その子も私たちも同じように神様の恵みの場に生かされているからです。では、その答えは何か。それは、希望の火を消さないことです。なぜなら、私たちが神様の恵みを分かち合うことが赦されているなら、両親に愛され、また私たちに愛されているとのその気持ちが、ちょうどペトロがそうであったように、その子に必ず神様に向かって目を開かせるに違いないからです。ですから、そのためには私たちは、この恩恵の場において、私は私であることをはっきり見つめるものでありたいと思うのです。自分という小さな小さな殻に閉じこもるのではなく、人とつながり、諦めずに分かり合うことを目指していきたいと思うのです。それも、しかめっ面でそれをするのではなく、イエス様のように柔軟に、自由に、笑い声を絶やすことなく、人と関わり、世に希望を運ぶことのできる、そういうものでありたいと思うのです。祈りましょう。